2012 年 2 月 8 日放送

漢方頻用処方解説　猪苓湯①

日本大学　統合和漢医薬学分野　　**上田　ゆき子**

猪苓湯は猪苓、沢瀉、茯苓、阿膠、滑石の５つの生薬からなる処方です。処方名は主薬となる猪苓から名づけられています。一回目の本日は、猪苓湯の主な効能、出典、生薬構成などをお話ししていきます。

効能ですが、猪苓湯は『傷寒論』に収載されている処方の中で使用目標が現代医学的にも分かりやすい処方であると言えます。小便不利、淋瀝、口渇、血尿などは、現代医学的にそのまま置き換えて考えられます。淋瀝とは膀胱に炎症があって、排尿痛や残尿感、頻尿などのある疾患のことですから、下部尿路感染症ですね。猪苓湯が使用される疾患名としては、ほかに尿路結石、膀胱神経症、無症候性血尿、腎盂腎炎などがありますが、いずれにしても泌尿器科疾患で使用されやすい処方であるということです。

次に猪苓湯の出典です。猪苓湯は『傷寒論』と『金匱要略』が出典となります。『傷寒論』は陽明病篇に最初の記載があります。「陽明病、脈浮にして緊、咽燥き、口苦く、腹満して喘し、発熱汗出で、悪寒せず、反って悪熱し身重し。（略）若し渇して水を飲まんと欲し口渇して舌燥の者は白虎加人参湯之を主る。若し渇して水を飲まんと欲し小便利せざれば、猪苓湯之を主る。」とあります。

ここでは陽明病とありますが、大塚敬節（1900-1980）は、「脈浮にして緊」の部分は「太陽病」、「咽が渇いて口が苦い」の部分は「少陽病」、「腹が張って喘し、発熱で悪熱し身重し」の部分は「陽明病」であるとして、この条文は三陽の合病であるとしています。

いずれにしても、そのような陽証で、熱で苦しい状態の時に、さらに口が渇いて水を欲しがり、舌が乾燥しているときは白虎加人参湯がよく、同じく口が渇いて水を欲しがるが

尿が出にくいときは猪苓湯がよいと書いてあり、白虎加人参湯と猪苓湯との鑑別が記載してあります。

次に、少陰病篇です。「少陰病、下利すること六、七日、欬して嘔渇し、心煩、眠るを得ざる者、猪苓湯之を主る。」とあります。

大約すると、下痢が６、７日続いて脱水傾向があり、口が渇いて胸苦しくて眠れないようなときに猪苓湯が良いということですが、大塚敬節は、「この条文は真武湯の適応症状に似ているが、裏寒ではなく裏熱であって、本当の少陰病ではないので猪苓湯である」と述べています。

それから『金匱要略』です。淋病篇に記載がありますが、淋病というのは先ほども述べたように、排尿痛、残尿感などをきたす下部尿路感染症のことです。そこに「脈浮、発熱し、渇して水を飲まんと欲し、小便利せざれば、猪苓湯之を主る。」とあります。

つまり尿路系の病気で脈が浮いて発熱し、咽が渇いて水を欲しがり、尿が出にくいものは猪苓湯が良いということです。通常私達が猪苓湯を使用する場合、この条文によることが多いと思います。

さて、古くは『傷寒論』にさかのぼって記載がある猪苓湯ですが、実はその後の時代の中国医書にはほとんど猪苓湯の記載はありません。おそらく中国では猪苓湯はほとんど使用されなかったことが推測されます。その理由は分かりませんが、乾燥した大陸気候の中国と、四方を海に囲まれた湿った気候の日本では「腎・尿路系」、あるいは「水」にまつわる事情が違っていることが関係あるかもしれません。

日本の古医書では、江戸時代の吉益東洞の『方極』や『方機』に尿路感染症に猪苓湯を用いるという記載があります。『方機』では、「脈浮、発熱し、渇して水を飲まんと欲するのは猪苓湯の正証である。」とあり。猪苓湯の王道の使い方を述べています。他にも「猪苓湯は下利、咳、嘔、渇して心煩し眠ることができないものによい。」とあり、ある種の不眠に用いると記載があります。この辺りから、尿路感染症以外の症状に猪苓湯を使うという記載が見られるようになります。

和田東郭は、『導水瑣言』で「全身の浮腫で腫れに力があって、浮腫を圧迫するとすぐに元に戻り、呼吸が平常と同じというものに猪苓湯が良い。」としており、浅田宗伯は、『勿誤薬室方函口訣』で、猪苓湯について下焦の蓄熱、利尿の専剤であるとしながらも、「水腫で実に属するもの及び下部に水気があって呼吸には異常のないものに用いるとよく効く。」と記載しています。

近年の臨床家では、大塚敬節は『漢方診療医典』において、「本方は尿路の炎症を治し利尿を円滑にする効があり、膀胱炎、尿路結石、腎盂炎、腎炎などに用いる。また不眠に用いる。」として、泌尿器科疾患あるいは不眠に対しての使用を述べています。

このように、猪苓湯は中国よりもむしろ日本の臨床家の間でよく研究され、それによって古典を越えて適応が拡大していった薬と言えるのです。

では、最近の使い方はどうでしょうか。薬理学的な EBM をいくつか紹介いたします。

古典では、猪苓湯は下部尿路感染症に使用されますが、現代では感染症にはやはり抗生剤が第一選択になります。むしろ明らかな尿の異常所見がないにもかかわらず、下部尿路の不定愁訴がある場合には、西洋薬よりも猪苓湯が有効であるとの報告があります。そのほかに、抗精神病薬の副作用としての排尿異常にもちいて高い改善率が認められています。

また、尿路結石症においては、下部尿路の場合は西洋薬の抗コリン薬よりも猪苓湯のほうが自然排石率が高いという報告があり、上部尿路の場合は芍薬甘草湯を併用することで排石率が上がるとの報告があります。

さらに、病態モデルでは、猪苓湯が血中コレステロールや中性脂肪を下げる働きや、腫瘍発育遅延の働きも報告があり、猪苓湯が単なる泌尿器科領域の薬ではないことを示唆しており、今後の研究が待たれています。

続いて猪苓湯の生薬構成についてです。猪苓湯の薬能を生薬から考える場合、五苓散との違いからみていくと分かりやすいですから、そのように説明したいと思います。

利水剤の代表である五苓散は桂枝、朮、沢瀉、猪苓、茯苓の五味からなりますが、猪苓湯はそのうち桂枝と朮の 2 つを除き、代わりに阿膠と滑石を入れたものと考えられます。五苓散と猪苓湯は口渇と小便不利という共通の症候をもつ方剤でありますが、2 つの生薬が変わることによって異なる効能があるわけです。

例えば、胃中に冷えがあるような場合、温めなければならない場所があるときは桂枝と朮が必要で五苓散を用い、逆に冷やして熱を取らねばならない場合は滑石と阿膠が必要で猪苓湯を用いるのです。また五苓散はどちらというと、上焦、つまり横隔膜より上部に効かせる薬であり、猪苓湯は下焦、つまり下腹部に効かせる薬となっています。このように二味の違いで、薬の作用部位が異なるのも面白いところです。

また、猪苓湯に含まれる阿膠には止血作用があります。それで結石や膀胱炎などで出血症状がある場合にも猪苓湯を用います。阿膠は馬やロバなどの動物の皮膚から作られたニカワです。止血作用のほかに鎮静、鎮痛作用もあります。滑石は天然の陶土、カオリンの一種で含水硅酸アルミニウムは主成分です。消炎利尿作用、止渇作用があります。猪苓はサルノコシカケ科チョレイマイタケの菌核です。利尿、解熱、止渇作用があります。茯苓はサルノコシカケ科マツホドの菌核です。強心、利尿、鎮静作用があります。沢瀉はオモダカ科サジオモダカの根茎で利尿、止渇、鎮静作用があります。

このように猪苓湯は 5 つという少ない生薬で、薬効も分かりやすく、生薬構成から効能・効果が推測されやすい方剤であるといえます。また動物性と植物性と鉱物性との 3 つの生薬が配合されているところが特徴的です。

今回は、猪苓湯の出典と効能、生薬構成についてお話しました。次回は、実際の臨床現場における猪苓湯の処方のポイントや、鑑別処方、特に猪苓湯合四物湯に重点をおいてお話ししたいと思います。